

NAB Show 2016 に期待する

為ヶ谷 秀一

はじめに

「NAB Show 2016」は、4月16日(土)～21日(木)(機器展示会は18日～21日)の6日間にわたって、ラスベガス・コンベンションセンター(LVCC)で開催される。

今年のNAB Showのテーマは「UNLEASH」である。メディアやエンターテインメントの分野は、テクノロジーの進化によって、それぞれの領域に閉ざされていたパワーが解放されて来ていることを意味していると言える。

NABでは、放送、デジタルメディア、映画、エンターテインメント、通信、ポストプロダクション、大学・研究機関、広告、軍事、政府、小売業、セキュリティ、スポーツ、ライブイベント、オンラインビデオ、IT、VR & ARなどを始め、大きく広がったメディア産業分野で急速に進められているイノベーションやビジネス展開の変革の状況が、このNABコンベンションに集積されて来ている。

将来に向けた新しいメディアサービスの展開において、4K、8Kがもたらす高精細・高品質映像(UHDTV、HDR、HFR、高色域)、高品質音響(サラウンド)システムが、どの様にコンテンツのクオリティを高め、新しいサービスを視聴者やユーザーに届けられるのかを知ることができるのが、このNAB大会への大きな期待である。

日本では、4K、8Kスーパーハイビジョンシステム(UHDTV)への取り組みが、2020年およびそれ以降に向けたロードマップが示されており、急速に進められて来ている。

総務省が公表しているロードマップは、以下のURLで参照できる。

(4K・8Kロードマップに関するフォローアップ会合 第二次中間報告 平成27年7月30日)

http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01ryutsu11_02000058.html



(出典) 総務省「放送サービスの高度化に関する検討会」参考資料

このロードマップに沿って、衛星放送(BS17ch)による4K・8K試験放送が、電波監理審議会の答申を受けて、8月1日よりNHKによる8K放送(一部4K放送)、12月1日よりNexTV-F(次世代放送推進フォーラム)による4K放送(一部8K放送)が、チャンネルを時分割して開始される。

日本における次世代放送や、通信やネットワーク技術の進化によるメディアの多様化に向けた取り組みに対するビジョンを構築することにおいても、このNABでの動向は多くの示唆をもたらしてくれるものと期待している。

昨年のNABコンベンションの実績

昨年のNAB大会の規模は、次のような数字で表されている。

「NAB2015 大会参加者数」

- ・総トータルの登録者数 103,119名(前年98,015名)
- ・海外からの参加者数 26,319名(前年25,989名)
- ・参加国数 160+ヶ国(前年159ヶ国)
- ・出展社数 1,789社(前年1,746社)(展示会場は、サッカー場11個分)
- ・取材者数 1,635名(前年1,674名)
- ・ビジネス 198億ドル以上
- ・コンファレンス 767セッション

昨年のNABにおける「NAB会長オープニング演説」

NABのCEOに就任して5年目を迎えたGordon Smith氏は、昨年のオープニング

講演で次のように語った。

「この5年を振り返ってみて、当時、“テレビやラジオの未来は、もはや消滅する古い技術だ。”と評論家たちが論じていたが、現状を見ると、今やラジオやテレビの放送は、今まで存在してきた状況よりも、今日は極めて重要ものになっていると確信している。メディアには多くのプラットフォームが出現して来ているが、何時もそこにあるのは放送局である。しかし、今、放送事業者においてもイノベーションが求められている。今年も展示会場には、SPROCKITにある様なスタートアップの企業や、ドローンパビリオンを始め、クラウドコンピューティングのコンファレンスなども行われており、次世代デジタル放送となるATSC3.0のシステムや、4K-UHDTVの高解像度&ハイダイナミックレンジ(HDR)システムやNHKによるスーパーハイビジョン8Kシステムの展示が行われている。

メディアが多様に分散してくる状況に対しては、フレキシビリティ、IPインターオペラビリティなどを重視し、新しい収入源などを次世代のために創り出していかなければならない。放送局にとっても、コミュニティに対してより良いサービスに向けたイノベーションが求められている。そしてまた同時に、モバイルメディアとの競争力も高めなければならない。」と、放送事業者も自らの変革が求められている状況を厳しく意識させる演説を行っていた。

今年もオープニングに行われるNAB会長の年次報告(State of the Broadcasting Industry)は、大統領選挙を控えた米国の状況も含めて、放送事業やメディア産業の将来に向けたNABの活動が注目される。

NAB Show 2016の基調講演

今年のオープニングでは、NAB会長の演説に引き続き、ディズニー・メディアネットワーク副会長、ディズニー・ABCテレビジョンネットワーク会長のBen Sherwood

氏による基調講演が行われる。

Sherwood氏は、ABCスタジオ、ABCネットワークと共に、ケーブルテレビやHuluの様な動画配信ネットワークなども担当している、正に多様なメディア展開を図っている中心人物である。特に注目されるのは、100を超えるタイトルの子供向け、家庭向け番組を制作し、ディズニー・チャンネルなどにより、現在163ヶ国に向けて、34ヶ国語によるコンテンツを配信しているメディア展開への取り組みである。

24,000時間を超えるオリジナル・コンテンツの供給と、そのコンテンツのマルチチャンネル展開が、どの様な戦略で取り組まれているのか、この講演で注目するところである。

NAB Show 2016でのコンファレンス

NABでは、最新の機器展示と共に、技術分野、コンテンツ制作、放送局経営など、広い分野にわたり多くのコンファレンスやセッションが開催される。

放送技術に関する論文発表などが行われる「Broadcast Engineering Conference」を始め、13を超えるコンファレンス・セッションが開催される。

今年のトレンドを反映して、新しく三つのセッションが設けられている。

- ① **Multicultural TV & Radio Conference**
テレビやラジオ番組における文化的側面(民族、国家、宗教、ライフスタイルなど)にフォーカスした議論を行うセッション
- ② **Satellite Industry Forum** 何時でも、地球上の何処でも、放送や高品質映像コンテンツの配信を可能とする衛星ビジネスの役割について議論するセッション
- ③ **Virtual Reality Summit** VRに対する関心の高まりと共に、新しいVR体験、VRコンテンツ制作、VR機器開発などについて議論するセッション

これらのコンファレンスでは、新しいビジネスモデルの提案から、先端の技術開発領域まで、幅広い議論がそれぞれの分野で行われる。

Future of Cinema Conference(映画の未来) ～ The Immortal Movie ～

このセッションは、2002年より10

回続いたデジタルシネマ・サミットから、TSCと名称を変えてから昨年は4回目の開催であった。

そして、今年は「Future of Cinema Conference」とセッションタイトルを変えての開催となっている。

このセッションは、SMPTE(米国映画テレビ技術者協会)のプロデュースにより、機器展示会の始まる前の週末4月16日(土)、17日(日)の2日間にわたって開催される。NABコンベンションでは、映画のプロフェッショナルたちによる講演やパネルディスカッションが行われるコンファレンスとして開催されている。

昨年は、サブタイトルが「Building the Future of Storytelling」となっていたが、今年は「The Immortal Movie」となっている。(映画は不滅である)をテーマとし、次の100年の映画を議論する興味あるタイトルである。

Future of Cinema Conferenceの基調講演

昨年のデジタルシネマ・サミットでは、二つのキーノートスピーチが行われた。

① **Keynote「Leveraging New Technology to Preserve Creative Intent」** 映画に込めたクリエイティブな思いが、新しい技術の活用によって持続されるかなどの視点で、スクリーンの明るさから、ビットの深さや映画の保存までの広がった議論が行われていた。

② **keynote「Virtual Reality - Coming to a Display Near You」** 映画におけるVRやAR技術の導入による新しいシネマの創造について講演が行われた。

今年のFuture of Cinema Conferenceでのkeynoteは、ハリウッド映画「Life of Pi」などを制作した著名な監督で、アカデミー賞を多く受賞しているAng Lee氏によって行われる。Ang Lee氏は、これから公開される「Billy Lynn's Long Halftime Walk」の制作について講演することになっている。この映画は、4K、120フレーム/秒、ステレオスコピック3Dで制作されている。

今年の11月にソニーピクチャーズにより公開される予定であるが、120フレーム、4K、HDR(ハイダイナミックレンジ)で制作された初めてのメジャー作品と言える。

次世代の映画制作に向けた技術開発や制

作ノウハウの蓄積を目標として取り組まれており、2台のレーザープロジェクターにより立体上映されることになっている。

おわりに

今年特に注目されているのは、Drone(ドローン)やVR(バーチャルリアリティ)分野の動向である。特にVRのヘッドセットは、CEA(コンシューマー・エレクトロニクス協会)によると、一昨年より急成長を続けているとレポートされている。この分野のニーズに対応するコンテンツ制作や、配信などに関する多くの機器展示や技術発表が行われるものと言える。

UHDTVの分野では、4Kシステムの進化と共に、新しくHDR(ハイダイナミックレンジ)機能を持ったテレビも登場して来ており、HDRコンテンツ制作や、衛星放送やネット配信などへの関心も高まって来ている。

IP技術の導入も、HD、UHDおよびHDRプロダクションへの展開で、技術開発も急速に進んで来ており、ライブシステムでの活用へと広がって来ていることにも注目しておきたい。

放送メディアが4K・8K UHDTVへと急速に進化をしている中で、映画の世界もハイフレームレート、HDRや高色域映像(WCG)への取り組みを積極的に進めている。

NHKは、今年もFutures Parkで8Kスーパーハイビジョンの進化した技術を紹介する予定になっている。そこでは、ハイダイナミックレンジ(HDR)、広色域(WCG)、120フレーム/秒のハイフレームレート(HFR)、そして22.2チャンネル音響と350インチのスクリーンにより、最新の8Kコンテンツの上映が行われる計画である。

また、ブラジルのリオで開催されるオリンピック中継に使用される8K中継車や、8Kカメラ、8Kポータブルカメラ、HDRの8K・LCDディスプレイなども展示される計画である。本年8月1日の衛星(BS)による試験放送の開始に向けて実用化が進む8Kスーパーハイビジョンシステムは、今年もNABの中でも注目される展示となるものと期待される。

Hideichi Tamegaya
女子美術大学